

八代市長 中村博生 殿

令和4年5月17日

八代市厚生会館のホール再開を求める会

代表 森精一

八代市本町1-6-15

連絡先 090-1701-3353 (事務局・櫻井力助)

0965-32-6188 (森精一)

八代市厚生会館ホール(劇場)再開の要望書

八代市厚生会館は、初代市長の坂田道男氏が欧州遊学中にオーストリア・ウィーンのブルグ劇場を見て「こういう劇場がウィーンの文化を培い、養っているのだ」と感じ、「八代にもこれに劣らぬホールを作りたい」と思ったことがその始まりでした。そして設計を依頼したのが、世界的に著名な建築家の芦原義信氏です。芦原氏の外部空間を生かす建築思想の「出発点」となった建築物として、現代建築史において高い価値がある(国際学術組織「DOCOMOMO」日本支部が2020年度、「日本におけるモダン・ムーブメントの建築」の一つに認定)だけでなく、「本物の文化芸術発信の拠点を」という崇高な思いに適した音響など各種設備が施され、国内外の演奏家やアーティストなどから高い評価を受けました。約60年間、さまざまな公演が開催され、市民の感性を磨いてきました。県南でこのレベルの施設は他になく、八代市ひいては県南地域の文化レベル向上に大きな役割を果たしました。地域にとってまさに「かけがえのない宝」といえます。

八代市民俗伝統芸能伝承館の建設に伴って休館し、市民は再開を待ち望んでいましたが、八代市は昨年春、老朽化などによる改修に多額の費用がかかることを主な理由にして「ホール(劇場)としては再開しない」方針を発表しました。しかも、実は発表の1年以上前にすでに厚生会館の主電源設備は取り壊されていました。さらに発表から今日までの1年余を見ていても、建物維持に必要な補修やメンテナンスはされず、市の広報誌などでは八代城址周辺の地図から厚生会館を消し、まるで存在しないかのような扱いです。その一方、今月からホワイエ部分の利活用を民間募集すると

発表しており、矛盾を感じます。

私たちは厚生会館を巡るこうした現状が地域文化の危機と捉え、市民に訴えとともに、ホール再開を求める署名活動を昨年暮れに開始しました。その結果、5月8日現在で1万374人の賛同署名をいただきました。

建築としての高い価値、そして文化・教育面でも高い価値を持ち、さらに隣接する八代城址や八代市立博物館未来の森ミュージアムなど特徴的な建築・施設が集積する地区としての活性化の可能性など、厚生会館の再開を市民は熱く望んでいます。

1万374筆の書名を添えて、八代市厚生会館のホール再開を要望いたします。

中村市長は、広く八代市民の声を聞くため各校区との対話集会を開催し、懇談を行い、市政に反映させるべく努力を続けられていると聞いております。それは八代市と市民のことを思う心の表れであると感服しております。ぜひ私たちの思いを汲み取っていただきたいと願っております。

なお、これまで八代市が改修費圧縮や予算措置の手法、ホールの適正運営などについての検討結果を市民に説明しておらず、それらをどこまで綿密に検討したうえで「再開しない」と決定されたのか不透明です。当会として、これらの諸事項について独自の提言を別途、提出したいと考えておりますことを付け加えさせていただきます。

八代市の財政が、扶助費の増大などによって厳しい状況であることは承知しております。そうした中でも、この「かけがえのない宝」である厚生会館を何としてでも保存・活用するための予算を作り出すということは、市民文化に対する八代市行政の深い理解と熱意を象徴する事例として、後世に大きな足跡を残すものと言えるのではないのでしょうか。

記

1. 八代市厚生会館のホールを再開すること。

2. 八代市厚生会館の維持に当面必要な予算措置を早急に実施すること。

以上